



学内学会会報 第22号

「福祉教育の末席につらなる者として」

今春ご退任された遠藤興一先生よりご寄稿いただきました。

遠藤 興一



遠藤 興一 先生

専門も、主要な講義科目もずっと社会福祉史です。気がつけば40年近く、だらだらと授業を繰り返す日々を重ねてきました。文字どおり教員の「末席」をけがすことだけがすべて、それをもって長い間続け得たからと、「とりえ」といって良いものか、はなはだ疑問があります。で、授業のなかみに触れると、これまたはなはだけしからぬ、手抜き工事をやっております。

そのいいかげんさを、定年退職を前にして、告白と懺悔をすることにしました。そもその原因は私が映画少年だった頃にさかのぼります。小学校に入るか、入らない時分からずずっと、のしつかとトイレの臭いが交った場末の映画館が、私にとって大人の世界をのぞく「社会の窓」でした。洋画、日本画、チャンバラからおいろけ物まで何でも観ました。それが長じて教員になってからも、授業の「教材」として映画ビデオを活用（誤用！）するわけですね。なかからいくつか、授業で使った作品を紹介してみたいと思います。

思いつくままにいうと、まず「小島の春」。これは夏川静枝主演の昭和15年製作、原作は同名のベストセラー。若き女医が各地に潜在するハンセン病患者とその家族を尋ねて歩くルポルタージュ。上映したあと、やおら「これは差別を助長する映画です、わかりますか」と問いかける。学生の大半はげげんな顔をして私をみます。「何故、どうして」、「それは自分で考えなさい」。2時間ぶっとおして上映した映画に「赤ひげ」があります。ご存知黒澤明の代表作。でもいまだきの若者は百パーセント、この映画を知らない。何たって

この時20代の成年医師を演じた加山雄三が今や喜寿のシルバーになっているんですから無理もありません。裏話をひとつ。黒澤は映画化にあたって原作者の山本周五郎を訪ね、「何か注文、条件はありませんか」と問うと「いいえ、ありません。どうぞご存分にお撮り下さい」。ただひとつ「この赤ひげという人物はいつ、どこで、どのようにしてかはわからないが、ふつうだったらしょっても、しょいきれないほどの苦悩や悲しみを心の奥底にしまい込んでいる。そのことだけは覚えておいて下さい」と。この慧眼な監督、やおら眼を輝かせて「よおく、分かりました」。洋画もやりました。もう30年以上昔になりますが、「エレファントマン」という身体障害者を主人公にしており、実話を映画化したもの。本当の「やさしさ」とは、「苦しみ」によってこそ育つものだと教えてくれます。ハリウッド映画ではケビン・スペースイ主演の「ペイ・フォワード」。こちら主人公は障害者で、やけどの跡を隠している教師です。まあ、いまでもTUTAYAに行けばこれは借りられますから、だまされたと思って観て下さい。麻薬、アルコール依存、D・V、ホームレス問題と考えさせられる話題は盛り沢山ですよ。

原田美枝子という女優さんがいます。この人がひとり2役をやって成功し、演技が光るのは「愛を乞う人」。こちらは児童虐待がテーマですが、観た女学生の何人かから、残酷で、きもちが悪くなった。遠藤先生って悪趣味なんですねっ、だって。したたかぶたれて血を流し、たたかれて歯が抜けても、母を慕い続ける娘の姿に、私などは心底涙を流しましたよ。それなのにちっとも分かってくれない。私は学生に「これはね、ひとが自立するためには、過去と向き合って、そこできっぱりと別れることを心の問題として経験しなくてはなりません。それがこの映画のテーマなの」といいます。説明は省きますが「名もなく、貧しく、美しく」や「恍惚の人」は高峰秀子が主演で、いつもうまいなあと感じてしまう。ん、アンジェイ・ワイダの「コルチャック

ク先生」も忘れられないなあ。アウシュビッツに収容されてしまう少年、少女たちとコルチャックの交流を描いている。エンディングが幻想的になって、私としては不満なんですけど、「死の受容」という昔も今も、つまり永遠に問い続ける、特に社会福祉にとっては切り離すことができないテーマです。

それに比べると邦画で、私の専門領域に入る伝記映画などはおしなべて何かモノ足りなさがついてまわります。「石井のおとうさん」(石井十次)、「死線を越えて」(賀川豊彦)は有名俳優を使って、お金もつき込んでいるのですが、あまりにキレイゴト過ぎるお話。人間の描き方が平板なわけ。きりがいいから、こちらでおしまい。ところで、ね。皆さん、大学の講義

がタイクツなのはあたりまえですよ。頭に知識をたたみ込む訓練をしているのですから。そんな授業のなかに、感性やココロの奥底に触れる場面があってもいいんじゃないかと、手前勝手なりクツをつけたうえで、社会学部の学生さんたち、かつて校舎の片隅でこんな授業もありましたよ、と申し上げておひらきにしましょう。最初は黒澤明に感動(例えば『生きる』)し、次に小津安二郎によって人生のながみをかみしめ(例えば『東京暮色』)、最後に成瀬巳喜男から、人間のどうしようもない弱さ(例えば『浮雲』)を教えられ、福祉の現場に出ていく、なんていうのはどうでしょう。なんだか、懺悔らしくないなあ。すいません。

児童養護施設の日常が投げかける問いの重さ 映画『隣る人』上映会・監督講演会を振り返る

報告：野沢 慎司
(社会学部教授・社会学科)

昨年度、初めて学内学会の企画担当を経験した。学生委員の鈴木康介君が映画監督による講演というアイデアを持って私の研究室を訪れてくれたのは昨年の5月だった。そこで思い浮かんだのは、『隣る人』という映画であった。すでに周囲から評判を聞いて興味を抱いていたその作品のチラシが研究室内に貼り付けてあった。様々な事情から親と離れて埼玉県内にある児童養護施設で暮らす子どもたちと保育士たちの日常生活を、8年間にわたって撮影したドキュメンタリー映画である。

まずはその作品を観てみなければと、時間を見つけて東中野の映画館に足を運んだ。観終わって、社会学部の学生たちに是非観てもらいたい作品だと強く感じた。上映後、(まったく予定外)に舞台挨拶した刀川和也監督とこの児童養護施設の菅原哲男理事長のお二人とロビーで直接お話しすることもできた。明学で上映したいという気持ちは一層強まった。後日この作品を観た鈴木君も同意見だった。上映会後の監督講演を含めた企画案を詰めた鈴木君は、映画のプロデューサーと話をつけ、着々と準備を進めてくれた。

上映会・講演会の当日(11月20日)、所用のために遅れて会場に駆けつけると、300席の大教室がすでに満席状態。立ち見も出ている。しかも、授業中にはめったにみられない真剣な眼差しで銀幕を見つめる学生たちばかりだ。私の予想以上にこの作品は学生たち(だけでなく学外からの参加者も多かった)の関心を

惹きつけていることが感じ取れた。続く刀川監督の講演では、氏のバックグラウンドから、この児童養護施設理事長の菅原哲男氏の著書『誰がこの子を受けとめるのか』(言叢社、2003年)を読んで施設での取材を申し込み、実際に施設の日常生活を映像にするまでの苦労話など、映画制作の背景と舞台裏を語っていただいた。そして、養護施設で働く保育士が子どもたちの「隣る人」として過ごす私的空間をいかにして映像化できたのかを解説してくださった。「隣る人」とは、菅原氏の造語で、「子どもの存在を丸ごと受け止める大人の存在」を意味している。



刀川 和也 監督

講演後の質疑応答の時間に、社会学科4年生から「子どもたちにとって親子関係が特別な重みをもってることが状況を難しくしているのではないか」という趣旨の質問が出されたことが印象に残っている。刀川監督は、「血縁の有無が大事なのではなく、血縁がなくても愛情に基づく絆が作られることが重要なのだ」という趣旨の応答をされたことと記憶している。要するに、普遍的な「人間愛」の大切さを強調しておられた。この作品に寄せられた批評家のコメントや宣伝文は、そこに描かれた「人間愛」を賞揚していたが、それと軌を一にした回答である。監督の意図もやはりそこにあったのかと改めて確認できた。

しかし、この作品を観ることで私が（そしておそらく質問したその学生も）はっきりと知ることができたのは、「子どもの存在を丸ごと受け止める大人の存在」になるという努力が児童養護施設の保育士に（ときに子どもにも）辛い状況をもたらすことがある、という事実である。そのことを具体的な日々の描写の中から気づかせてくれる点にこそ、この作品の真の価値があるのではないかと質疑応答を聞きながら考えていた。

親が自分の子どもを愛せるのは、単に血縁があるからではない。それが文化的・制度的に「自然なこと」とみなされ、期待されているからでもある。愛情をもって自分の子どもを育てることは、必ずしも容易ではないが、そうしようと思えば親はそれを独占的に行うことができる（むしろそうしないと非難されることが多い）。しかし、施設の保育士は子どもに愛情を注ぐことに専心し、独占的に子どもとの強い絆を築けばよいわけではない。それよりもはるかにデリケートで複雑な状況に置かれている。この映画には、施設で暮らす子どもの親が子どもとの関係を修復し、子どもを引き取って同居する生活を実現しようと意図して子どもと面会交流する過程が詳細に描かれている。子どもが親との交流をする場合、すでに親以上に子どもと親密な保育士は、子どもと親の関係形成を内側から支援するという（通常、親には期待されない）難しい役割を担わざるをえない立場に置かれる。

さらにこの映画には、施設運営上の都合で保育担当者が交代する場面も描かれている。それまで自分の「隣人」だった保育士と別れる日、幼い子どもが号泣するシーンが今も脳裏に焼き付いている。「隣人」が職業人としての保育士である以上、退職や配置換えという事態は免れない。保育士自身の人生設計（自分の結婚・出産や子育てなど）が、施設の子どもの「隣人」であり続けることと葛藤し、ジレンマが生じることは容易に想像できる。子どもに愛情を注ぐことは、むしろ将来別れざるを得ないことになったら子どもに大きな悲しみをもたらすリスクでさえあるのだ。そのような状況に「人間愛」という概念を当てはめよ

うとするならば、現場の保育士たちの心理的苦痛を増幅させかねないことも想像に難くない。親に代わって子どもを養育するための社会的養護制度の理念は理解されやすいが、現場の具体的な苦悩は理解されにくい。したがってこの作品は、「人間愛」に感動するためではなく、社会的養護の現実、その複雑さ、苦しさを知するためにこそ広く観られるべきである。

ではどのような制度や実践があるべきなのか——その問いに対する答えは提示されていない。そのような問いを多くの人が問い始めるためにこそ、この作品は観られるべきである。この作品の社会的価値は、その点で制作者の意図を超えているように私には思えた。

最後になったが、ご講演いただいた刀川監督、映画化にはいかに大きな覚悟が必要だったかを後日メールで語ってくださった菅原理事長、そして鈴木君をはじめ企画・運営をしっかりと担ってくれた学生委員諸君に、この場を借りて心より感謝申し上げる。

2012年度 学内学会事業報告

★会報21号発行

5月31日(木) 発行部数 5,500部

★第22回総会・特別講演会・懇親会

6月30日(土) 白金校舎 本館4階1455教室

総会には、学生43人、教員7人、卒業生21人の計71人が参加した。また、総会後の特別講演会では、社会福祉学科の村上雅昭教授が、「Ianとの出会い—Optimal Treatment Projectとみなとネット21—」をテーマに講演を行い、一般からの参加者を含めて69人の出席者があった。

★研究発表会

12月1日(土) 発表者は、ゼミ8件、個人参加14件（学部生6件、大学院生6件、卒業生2件）。発表者を含めて112人の参加者があり、3つの会場で活発な発表が行われた。

・第一分科会（1455教室）

『フィールドワーク』による変容と可能性—知を力とするために— 宮本浩太郎（社会福祉学科2年）

「Cycle of Street Children in Cambodia」

明石留美子ゼミ

「ストリートチルドレンが展望を抱くための支援のあり方について」

明石留美子ゼミ

「宮古島における地域特性と地域福祉の現状」

河合克義ゼミ

「障害児の余暇支援について」

中野敏子ゼミ

「障害者雇用における企業の合理的配慮」

関川美果（社会福祉学科3年）

「TEACCH・構造化を用いた支援について」

綾部 光（社会福祉学科4年）

・第二分科会 (1456教室)
「NPO法人森の生活—事業型NPOが内発的發展・地域發展の担い手となりえるか—」 坂口 緑ゼミ
「ボランティア—セクターを支える人—NPO法人アクションポートの場合—」 坂口 緑ゼミ
「<経験者>の力学—<学校へ行かなかったこと>の語りからみる『生きづらさ』についての考察—」

和田葉月 (社会学科4年)

「マイノリティ認知のためにメディアは何が出来るか」
興津菜由 (社会学専攻博士前期課程)
「障がいを持つ人のエンプロイアビリティ向上を支援する企業の取組事例について」

沼田元明 (社会学専攻博士後期課程)

「全共闘世代のライフヒストリー」 渡辺雅子実習
「首都圏自治体の非常事態体制の考え方」

加藤淳一 (1995年社会学科卒業)

・第三分科会 (1458教室)

「浜岡原子力発電所の未来」 水谷史男ゼミ
「現代日本社会における行商および配置薬販売業の社会的役割と再挑戦—富山の薬が抱える一人帳主問題の事例を参考に—」 榎本忠宣 (社会学科4年)

「現代日本における外国人研修生・技能実習生」

鈴木創一郎 (社会学科4年)

「公民科教育の研究」

数間 亮 (社会学専攻博士前期課程)

「男らしさと新しい生き方—ある男子大学生のライフストーリーから—」 唐澤幸容 (社会学専攻博士前期課程)
「セクシュアリティの可塑性」

山本光祐 (社会学専攻博士前期課程)

「子どもの健全育成に関する一考察—現代の子ども親から—」

石渡拓也 (早稲田大学大学院文学研究科社会学コース修士課程1年)
「被災地を継続的に訪れて—子どもとの関わりから—」

山下剛史 (2007年社会学専攻博士前期課程修了)

★Socially21号発行

3月19日(火) 発行部数 3,400部

2012年度 学生会・活動報告

★社会学部スポーツ大会 (担当 神山愛・久能一也)
5月19日(土) 白金校舎アリーナ体育館

バレーボール・大縄跳びの二種目に加え、今年度は、「台風の目」で競技が行われ、各種目の上位3チームに賞状と副賞金が送られた。学年・学科の垣根を越えて大いに盛り上がりを見せた。

★夏合宿 (担当 目野稜祐・山田修平)

8月27日(月)・28日(火)の日程で、千葉県白子町で合宿。参加者36人。1年生も多数参加して、秋学期の企画についての話し合いを行った。また、行きには成田山新

勝寺へ、帰りにはマザー牧場を訪れ、自然の中で親睦を深めた。

★社会学科ゼミサロン (担当 黒澤将平・吉沢桃子)

10月15日(月)~19日(金) 白金校舎本館4階

社会学科在籍の11年度生を対象に、次年度のゼミ選択に向けて各ゼミの先輩方から直接話を聞ける機会を設けた。ゼミごとのブース形式で行い、参加ゼミは17ゼミ、協力いただいたゼミ生は240人(のべ人数)、また、来年度履修予定の11年度生は120人(のべ人数)が参加した。

★福祉学科1年生コースガイダンス (担当 水野智栄・柳澤菜月)

11月15日(木) 横浜校舎822教室

1年生を対象に、履修コースについての説明を行った。実際の2年生が履修しているコース別時間割モデルを紹介する等、1年生からは好評を得た。1年生の参加者は約80人。学生会福祉学科の委員を中心に11人が運営にあたった。

★「隣る人」上映会&講演会 (担当 鈴木康介・黒澤将平)

11月20日(火) 白金校舎3号館3102教室

8年間にわたり児童養護施設の日常を記録したドキュメンタリー映画「隣る人」の監督である刀川和也監督をお迎えし、同映画の上映会及び監督による講演会を行った。学生だけでなく、教職員・卒業生・地域のお母さんたちも来場し、上映会には310人、上映会後の監督講演会には120人が参加した。例年になく来場者数を記録した。

異動・消息

2013年3月 社会福祉学科教授 遠藤興一先生が退任。

2013年4月 社会福祉学科に榊原美樹先生が着任。

2013年4月 社会福祉学科に米澤旦先生が着任。

学内学会 新体制

会長 岡本多喜子
(社会学部長・社会福祉学科教授)

副会長 (主任) 松原 康雄
(社会福祉学科教授)

副会長 西阪 仰
(研究所所長・社会福祉学科教授)

編集担当 稲葉振一郎 (社会学科教授)

企画担当 岩永 真治 (社会学科教授)

会計担当 村上 雅昭
(社会福祉学科教授)

卒業生部会委員長 星 靖夫 (1963年卒業)

学生会委員長 久能 一也 (社会学科3年)

2013年度 学内学会活動予定

- 4月2日(火) 新入生ガイダンスで広報(白金校舎)
- 5月18日(土) 社会学部スポーツ大会
- 5月20日(月) 新入生説明会(横浜校舎)
- 5月29日(水) 第1回合同役員会議
- 5月31日(金) 会報22号発行
- 6月10日(月) 学生会部主催上映会
- 6月29日(土) 第23回総会・特別講演会・懇親会
- 9月上旬 学生会部夏合宿
- 11月上旬 社会学科ゼミサロン
- 11月中旬 福祉学科コースガイダンス
- 12月上旬 研究発表会
- 2月中旬 第2回合同役員会議
- 3月上旬 卒業生部主催「春の講演会」(予定)
- 3月中旬 Socially22号発行

第23回総会・特別講演会のお知らせ

今回の特別講演会は、社会学科の浅川達人先生です。浅川先生から、講演についてのお言葉をいただいています。「私は2011年4月より本学ボランティアセンター長補佐として本学の被災地復興支援活動である「Do for Smile@東日本」プロジェクトの立ち上げから2012年3月の大槌町との協定調印までに関わりました。2012年度はサバティカルを利用して、津波被災地である大槌町吉里吉里を毎月訪れ復興支援活動に従事しながら参与観察を重ねました。復興支援活動の現場で何が生じているのか、社会学徒として何ができるか。議論したいと思います。」

日 時：2013年6月29日(土)
14時(受付開始13時30分)
会 場：明治学院大学 白金校舎
本館10階 大会議場

1. 総 会 14時～14時50分
議 題：(1) 会長挨拶
(2) 議長選出
(3) 2013年度学会役員について
(4) 2012年度活動報告および決算報告
(5) 2013年度事業計画および予算
(6) その他
2. 特別講演会 15時～16時30分
講演者 浅川達人先生(社会学科教授)
講演テーマ「津波被災地復興支援活動と社会学」
3. 懇親会 16時45分～18時30分

編集後記

会報第22号をお届けします。第一面には、今春ご退職された遠藤興一先生より頂戴しましたおことばを掲載させていただきました。また、第二面には去年秋(11月)に開催しました「隣る人」上映会・講演会について、野沢慎司先生よりご報告をいただき、掲載させていただきました。この場をお借りして、御礼申し上げます。今年度も学内学会では様々な企画を計画し、精力的に活動して参ります。ご支援のほど、よろしくお願い致します。

(学生会部編集担当 社会学科3年 黒澤将平)

上映会のお知らせ

「むかしMattoの町があった」上映会
2013年6月10日(月) 15:10～18:45
明治学院大学 白金校舎 本館10階 大会議場
入場無料・要事前申込み

問い合わせ先 shakaimg@soc.meijigakuin.ac.jp

この映画はイタリアでおきた精神保健改革を描いた作品で、精神病院解体の過程が描かれています。精神病院が解体されていく過程で、人もまた変わっていきます。この映画に、日ごろ精神保健に興味のない大勢のイタリア国民が引きつけられ、視聴率は21%以上だったそうです。「今の自分たちの状況を振り返るドラマとしても大きな意味があったのでしょ」という「Mattoの会」代表者の言葉が心に残ります。

上映時間は、前編・後編合わせて3時間の予定です。入場は無料ですが、6月6日(木)迄に事前の申込みをお願いします。

事前申込みは、メール(shakaimg@soc.meijigakuin.ac.jp)、またはファックス(03-5421-2957)で、お名前と連絡先をお知らせください。申込み多数の場合は、入場をお断りすることもございますので、あらかじめご了承をお願いします。

お知らせ

社会福祉学科卒業生からの国家資格についての問合せは、学内学会事務局が、メールまたはファックスで受け付けます。後日、社会福祉学科に問合せ、わかる範囲で回答いたします。

連絡先：〒108-8636 港区白金台1-2-37
明治学院大学社会学部付属研究所内
明治学院大学社会学・社会福祉学会
E-mail shakaimg@soc.meijigakuin.ac.jp

*住所変更の際はハガキ又はメールでご連絡下さい。